



日頃のつながり

地域力が

防災力を上げる

災害に立ち向かう
大田区の新たな防災対策

大田区は区民と一体となった防災力の向上をめざして「大田区総合防災強化検討委員会」を設置しました。これまで防災分野は男性ばかりでしたが、今回は福祉団体、公募区民など計6人の女性が加わりました。

自治体が「区民の命を守る」だけでなく、「最低限の生活を守る」視点に踏み込んで「防災力」と謳った方向性には、災害経験者や女性の視点が生かされようとしています。

委員会の検討結果は「大田区総合防災プログラム」となり、区の防災事業を推進しています。

●地域の初期消火能力を上げる

地震による火災被害を最小限に抑えるために、区内212の自治会、町会に初期消火活動を迅速にできる器具を配備しました。

●近隣の小中学校を防災拠点に

区内91か所の区立小中学校を、これまでの逃げ込む場所＝避難所から「災害に立ち向かう場所」「地域防災拠点」となるように機能の拡充を図っています。

平成11年から学校に設置されている「学校避難所運営協議会」の活性化を図り、地域の防災拠点づくりを急ぎます。今年度は馬込第三小学校、大森第六中学校の2校をモデル校に、3・11で避難訓練が十分行われていた学校ほど被害を最小にできたことなどの経験を踏まえ、種々の訓練を行い、検証を重ねていきます。

●災害時に強い通信環境の構築

特に児童・保育・高齢者・障がい者等の福祉施設には優先して据置型PHS電話を配備していきます。

●その他、道路ネットワークの確保、津波防災対策の推進事業を行います。

大災害発生時には、交通網の整備、情報発信、ライフラインの整備などに力が注がれ、実際に個々人の身の安全や生活の安心を守っていくのは地域力が

大きな鍵です。

しかし、地域力、共助への期待は都市では容易ではありません。

山王三・四丁目自治会の 楽しいノリノリ防災活動

ここ山王三・四丁目自治会の熱心な防災訓練事例は、地域力こそが防災の要だと、考えさせられます。

山王三・四丁目自治会は大森駅の近く、商店街、住宅街を併せ持つ約1800世帯（自治会加入1400世帯）が暮らす地域です。地盤は強固ですが、中心部は狭隘道路や坂道が多く木造家屋が密集します。

自治会は阪神淡路大震災の翌年、有志8人で市民消防隊「防災協力隊」を結成して、災害に対する啓蒙活動を積極的に開始しました。スローガンは「正しく知って、正しく怖がろう！」。広報は次のように具体的です。

「…家具を固定していない方は下敷きになる可能性があります…大災害発生時は管内の消防車は病院や重要な消火活動に入り、消防団もその指揮下に入ります。発生した火災は燃え広がるに任せざるを得ません。避難する



防災子どもまつりで消火器の使い方を訓練。

にも崖や塀が崩れて通れない、閉じ込められたり、挟まれたり。やっと避難所に逃げてても病人やけが人を世話する人もいません。留守の家は警ら団もなく荒らされ放題…」

自治会長の鈴木英明さんは実は現役のパイロット。危機管理のプロなのです。文字だけでなく音楽でも伝えようと防災バンドもつくりました。

●タテ・ヨコ・ナメに ネットワーク広げる

「自治会の催事は多様な目線からとらえる。ハードルを下げて皆が参加しやすくすることが肝心」と旧来の自治会活動に改良を重ね、いくつものアイ